

Title	『ヴァイマルのロッテ』にみるトーマス・マンのゲーテ像
Sub Title	Thomas Manns Goethe-Bild in „Lotte in Weimar“
Author	中村, 昌子(Nakamura, Masako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.195(218)- 212(201)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0212

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ヴァイマルのロツテ』にみる トーマス・マンのゲーテ像

中村 昌子

1. 『ヴァイマルのロツテ』成立の時代背景

1933年1月30日、大統領ヒンデンブルクによりヒトラーが首相に任命される。2月10日⁽¹⁾、トーマス・マンはヴァーグナー没後50年を記念する講演「リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大」をミュンヘン大学の大講堂で行う。翌11日、これが亡命につながるという予感もなく、マンはオランダ、ベルギー、パリでのヴァーグナー講演のために旅行に出る。講演を終えた後、2月26日から3月中旬まで静養のためスイスのアローザに滞在する。2月27日、国会議事堂放火事件が起こると、翌28日、政府は「国民と国家を防衛するための大統領緊急令」を発し、この緊急令により国民の基本的人権は実質的に廃棄されることになる。テロ・弾圧が横行する状況のなかで行われた3月5日の国会選挙で、ナチ党は国家国民党の獲得議席52と合わせてようやく649議席中340議席を獲得したにすぎなかったが、これで新政権は信任を得たとして勝利宣言をする。3月23日には「国民と国家の危難を除去するため」に政府に立法権を与えるいわゆる「全権委任法」が可決され、これによりヒトラーは国会にも大統領にも制約されることなくドイツを支配できるようになり、政党は存在理由を失う。3月31日に公布された「諸州の^{ライヒ}国との均^{グライヒシャルトウング}制^化のための暫定法」は、州のレヴェルにおいても事実上、議会制に終止符を打つ措置だった。こうしてナチスの支配が確立されていく。

アローザに滞在するマンのもとにはこの間各方面の友人たちから、目下

の情勢ではマンの一身上の安全は保証されないだろうという警告が届く。実は、妻カーチャは何ヶ月前から夫に亡命を勧めていた。ナチ党は1930年9月14日の国会選挙で12議席から107議席へとめざましい躍進をとげ、以後わずか一年半で巨大な政治勢力になっていったのだが、マンは国会選挙直後の30年10月17日、ベルリンのベートーベンホールで「ドイツの呼びかけ——理性に訴える」と題する政治的な講演を行い、増大するファシズムという新しい国粹主義の危険を訴え、ドイツ市民階級の政治的位置は今日、社会民主主義の側にあると述べた。講演は親ナチ派の連中から妨害を受け、途中何度も中断された。翌日のあるナチ系の絵入り新聞にはこう書かれていた。「トーマス・マンが講演を行う——この時から彼はナチの敵であることが公認されたのである」⁽²⁾。ナチスが権力の座につけば、それと闘ってきた夫の身が危険であると懸念したカーチャはしばしば夫に国外に去ることを勧めるが、マンは国内に留まることこそ自分が「勝利を信じているという合図」⁽³⁾であると主張したのだった。結局33年2月の講演旅行以来、そのまま国外に滞在することをよぎなくされたマンは、33年3月13日付ラヴィーニア・マックッティ宛の書簡で次のように心情を述べている。「帰国するのは実際無理だと思います。(……) 私は『常軌を逸した平和主義』や『祖国への精神的裏切り』の罪を犯した者のリストに載っているのですから。もっとも、何よりもまずバイエルンで、それも近いうちにある種の法的安定性が、何とか我慢できる程度 of 生活形式が回復して、家族ともども帰国できるということもあり得ます。いまのような恐ろしい状態が長びけば、私自身は国外に留まらざるを得ません。(……) ところで、私のような者にとってそもそも今後ドイツに活動の余地があるかどうか、ドイツの空気が私にとって呼吸できるものであるかどうか、これは大いに疑問です。私は、あまりにも生粋のドイツ人であり、ドイツの文化的伝統やドイツ語とあまりにも密接に結びついていますから、何年にもわたる、あるいは一生涯にもわたる亡命などという考えは、私にとって非常に深刻な、致命的な意味を持たざるをえません。にもかかわらず私達は必要に迫られて、新しい生活基盤となる場所を——できることならやはり少なくとも

もドイツ語圏で——探し始めました。』⁽⁴⁾

しかしマンはまだこの国に、この国の市民に信頼を寄せていた。「なぜなら、(……) 自由と理性の感覚は、根本的には、粗暴な連中や反啓蒙主義者たちの声高な叫びがわれわれに思い込ませているよりは広く浸透しているし、強力なのですから。」(1933年1月20日付ヴァルター・オーピツ宛書簡)⁽⁵⁾ところが33年4月16日/17日付「ミュンヘン新報」に、マンの講演「リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大」と「われわれのドイツの巨匠(ヴァーグナー)に外国で加えられた侮辱」⁽⁶⁾に抗議する「下劣きわまりない」⁽⁷⁾公開状が掲載され、ミュンヘンの主立った人たちがほとんど残らずこれに署名していた。マンはこの抗議文に「嫌悪と恐怖の混ざった激しいショック」⁽⁸⁾を受け、ミュンヘンには戻らず国外に定住する決心を固める。この抗議文はマンにドイツの状況の深刻さ、ドイツの精神の墮落、荒廃を改めて認識させたに違いない。マンのヴァーグナー論は、「この矛盾にみちた特異な人物を、その偉大な才能も人間的な弱点や異常性も含めて分析し論評した」⁽⁹⁾ものであり、またヴァーグナーがナチスに悪用されることを防ごうとする意図を持って書かれたことは明らかであった。この点がヴァーグナーを崇拜するナチスの怒りを買ったのである。

亡命生活は国から国への放浪生活で始まった。スイスのアローザ、ルガーノ、フランスのバンドール、サナリ=シュル=メールと転々と仮住まいをし、33年9月以降、再びスイスに戻ってチューリヒ近郊キュスナハトに家を借り、以後、最終的にアメリカに移住するまで五年間ここに居を定めることになる。57歳という年齢で市民としての生活基盤を奪われ、亡命という新しい生活形式を受け入れねばならないということは容易なことではなかったが、マンは次第に落ち着きを取り戻し仕事に取りかかる。34年と35年の二度のアメリカ旅行を挟み、ようやく36年8月23日、32年夏以来そしてミュンヘンを離れて3年6ヶ月近く執筆を続けた『ヨゼフ物語』第三巻『エジプトのヨゼフ』を擱筆する。

実質的に亡命生活に入っていたとはいえ、マンは公にナチスドイツとの絶縁を表明するまで3年間ためらい続けた。ドイツの精神的伝統に深く根

ざしているマンは、祖国との関係はできるなら断ちたくないと考えたであろうし、またドイツ国内で自分の著作が発売禁止になることによって読者との結びつきを失うことを恐れていた。マンは、「その本性と教養に従って今日政府に反対の立場を取っており、いつかは現政権に対する反対運動の源になるかもしれない私のドイツ人読者たちとの接触を維持することに重きを置いていた」(1935年9月1日付ハリー・スロホーヴァ宛書簡)⁽¹⁰⁾のである。こうしたマンの曖昧な態度は他の亡命作家たちの非難を受ける。いつかは自分の立場を明らかにするの必要を感じていたマンは、「新チューリヒ新聞」の文芸欄編集者エドゥアルト・コローディ宛の公開書簡(36年2月3日付)で、コローディの論説が反ユダヤ的な調子で亡命文学とユダヤ系文学を同一視していること、亡命したのは主として「小説産業」⁽¹¹⁾だと非難していることに抗議して、亡命作家の名誉を回復すること、および自分が亡命作家の側に立つことを表明したのだった。「現在のドイツ政権はドイツにとってもまた世界にとってもプラスになるはずがないという、無数の個々の人間的、道徳的および美的な観察や印象によって日々支えられ培われるこの深い確信——この確信が私にこの国を避けさせたのです。」⁽¹²⁾ヒトラー政権に反対するこのはっきりとした態度表明に対して36年12月2日、マンは財産を没収されドイツ国籍喪失を宣告される。さらに12月19日にはボン大学哲学部より名誉博士号を剥奪される。この間、新しい短編『ヴァイマルのロッテ』が計画され、36年11月より執筆が始められる。37年にはアメリカへ三度目の旅行をし、このときからマンがアメリカ移住を考えるようになったことは37年5月4日付カール・ケレーニ宛の書簡から推測できる。「多くの友人がいるアメリカとの結びつきはより緊密なものになっています。私たちは生涯の一部をアメリカで過ごすかと真剣に考えています。そういう風にヨーロッパから離れることは、私の心の自由と明朗さにとって限りなく有益でしょう。」⁽¹³⁾38年2月10日から7月初旬には15都市をめぐる講演旅行のため四度目のアメリカ旅行をするが、この旅行には移住の下準備というもう一つの目的があったようだ。38年9月、アメリカに移住すべくヨーロッパに別れを告げる。この

間『ヴァイマルのロッセ』の執筆は何度も中断されながらも続けられ、第二次世界大戦開始直後の39年10月に完成するのである。

2. ゲーテとマン

若きトーマス・マンはニーチェ、ヴァーグナー、ショーペンハウアーの「三連星」(XII 72)に強く影響されていたが、彼はゲーテとその作品もよく知っていた。すでに1905年の短編『悩みのひととき』にゲーテの姿が垣間見られる。この短編では主人公シラーが、本質的にはマンの分身と見なしてよいシラーが、病と苦悩のうちに創造する姿が描かれる。その生みの苦しみのひとときにシラーの想念は自分の本質、自分の芸術家としてのあり方と対立する「もう一人の男」に及んでいく。もう一人の男とは「あの明るい、物を手で触って見たがる、官能的な、神々のように無意識な男のこと、あのヴァイマルの、彼が憧れに似た敵意で愛している男」、つまりゲーテである。「あの男は神かもしれない——しかし英雄ではない。(……)けれども創造を神のものとするれば、認識は英雄の^{わざ}業だ。」(VIII 377)ここではシラーの『素朴文学と情感文学について』に倣って、素朴的なものと情感的なものとの対立、自然と精神との対立が、後者が前者を「憧れに似た敵意で愛する」という形で捉えられている。

1912年に発表された『ヴェニスに死す』の最初の計画は、70歳のゲーテが17歳のウルリーケ・フォン・レヴェッツォーに恋して本気で結婚しようとしたが、相手および自分の親戚から反対されたというゲーテ最後の恋愛を対象にして、「一個の魅力ある無邪気な生命に対する情熱によって、高位に上った精神が、威厳を失墜する」(XIII 148)ことを描こうとするものだった。しかし、当時のマンにはゲーテの形姿を呼び出すだけの勇気がなかったので計画は放棄された。『ヴェニスに死す』はゲーテのウルリーケ体験を全く別の形で描いたものとなった。

第一次世界大戦中に書かれた『非政治的人間の考察』(以下『考察』と略す)は、自己の土台を揺すぶられ、自己の存在価値を脅かされたと感じたマンの自己探求の書である。マンは芸術家としての自分の存在基盤であ

る非政治的なドイツ文化を西欧文明とデモクラシーに対して擁護する。そしてドイツ市民精神がいかに政治＝デモクラシー（『考察』当時、政治とデモクラシーはマンにとって同一の概念であった）と無縁であるか、敵対的であるかを繰り返し述べるが⁽¹⁴⁾、その証人としてニーチェやショーペンハウアーと同じくらい頻繁にゲーテも呼び出される。マンは言う、「ゲーテによって教養を身につけた、すなわち、造形的な観照を、単なる意見に過ぎぬものへの懐疑を身につけるよう教育された」ドイツ民族、「この民族の中に民主主義的な、すなわち、文学的政治的な雰囲気を作り出そうという文明的企ては失敗することを宿命づけられているのだ、と私は思う。と言うのは、教養、ゲーテがフランス気質に、つまり政治に対置したような『静かな』教養は、静寂主義的な気分のものであり、また、ドイツ人の深く非政治的な、反急進主義的な、反革命的な本質は、ドイツ民族のもとでうちたてられた教養理念の指導権と関連しているということには、全く疑う余地がないからである。」(XII 506)しかし、次のようなマンの微妙な心境のうかがえる言葉にも出会う。「この大戦において心身を挙げてドイツの側につき、ドイツの勝利を希求しながら、——しかもなお、きわめて密かなひとときに、この教養ある民族、この聡明で問題的な民族は、ヨーロッパの支配者ではなく、ヨーロッパの酵素になるべき使命を与えられているという見解に傾くこともあり得るのである。」(XII 507)『考察』という困難な自己探求の書に取り組むことにより、マンは自分が変わりつつあること、変わらざるを得ないことに気づく。最後に書かれた「序文」においてマンは、「私自身が、ドイツの『進歩』を促す諸要因を私自身の保守的な内面のうちに秘めているのだろうか？」(XII 40)と自問している。ここにデモクラシーへのマンの転身の可能性がほのめかされている。『考察』はマンのゲーテ像にデモクラシーという新たな観点を加えることになるのである。

『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』（第一部、1922年）は『詩と真実』をパロディー化したものであり、『幼な児の歌』（1919年）はゲーテのヘクサメーターを手本にしたものである。『「ヴィルヘルム・マイスター」

の小型版]⁽¹⁶⁾である『魔の山』は、1913年9月に執筆を開始したものの第一次世界大戦により中断をよぎなくされ、24年9月にようやく完成する。『考察』をくぐり抜けてきた『魔の山』は、「初めに死に対する共感、最後に生への奉仕の決意」というマン自身の「精神のメタモルフォーゼ」(XI 851)を展開したものである。

「ゲーテとトルストイ」(1921年に行われたこの講演は、1925年1月以降大幅に手を加えられ評論集『労苦』に収められる)は『魔の山』執筆中に書かれ、この作品と密接な関連を持つ。この中でマンはルソーについて言及し、ゲーテとトルストイが共有していた「一つの教養要素」はルソーであり、両者は「一般精神的にいえば革命や無政府主義の匂いさえするルソー主義者」(IX 66)であると規定している。マンは『考察』においてはルソーを「政治的精神そのもの、すなわち政治的人間性の父であることによって、デモクラシーの父」(XII 29)であるとしていたのであるから、ここにおいてデモクラシーへのマンの方向転換は明らかである。そしてマンは、ルソーの持つ「教育的」要素と「告白的・自伝的」要素の二つはゲーテとトルストイにも強く現れていると指摘する。両者の作品はすべて「偉大なる懺悔の断章」(IX 68)であり、そのような懺悔・告白、つまり自叙伝を書かせるのは自分自身に対する愛であり、この自己愛そして「何人にも知られ愛されたい」(IX 69)という自叙伝作者の切なる望みは世界愛、人間愛と結びついたものである。教育的要素は自伝的要素と切り離せないものであり、そこから生まれ発展してくるのである。ゲーテにおいて教育思想は、『修業時代』のまだ「個人主義的な自己形成の理念」(IX 67)から、『遍歴時代』の示すように「客観的なものに、社会的なものに、政治家的なもの」(IX 68)に成長してくるのである。

「ゲーテとトルストイ」において、マンはゲーテの諦念についても述べている。マンはゲーテを「神の子」(IX 96)、「アンタイオス的」(IX 92)な自然の子、「有機的なものに対する共感」(IX 92)を生まれ持っていた自然の子と見なす。これは『悩みのひととき』のシラーの目から見たゲーテ像が拡大したものである。しかし、ここではこのゲーテ像に別の要素が

加わる。時とともにゲーテの基本的モチーフとなったスピノザ的な「諦念」(IX 124)がそれである。ゲーテはキリスト教の「倫理的文化」、すなわちその人道性、教化的・反野蛮的傾向に敬意を表しているが、この傾向は彼自身のものでもあった。民族的・ゲルマンの世界におけるキリスト教の使命と彼自身の使命とが類似したものであるという洞察からその敬意は生まれている。ゲーテが国民の教化という自分の国民的使命を本質的に文明的(zivilisatorisch)なものとして理解していたことのうちに、彼の諦念のきわめて深いドイツ的な意義がある。『イフィゲーニエ』では人間性の理念は野蛮の対極として文明の刻印を獲得している。『イフィゲーニエ』も『タッソー』も、野蛮のさまざまな利点をドイツ的・教育的に断念した諦念の作品である。マンは、この教育的な諦念の義務はゲーテの個人的なものではなくて、「何らかの意味で多かれ少なかれ、常に形成し教育する責任を負うべき定めにあるあらゆる精神的ドイツ人に生得の、いかなる精神的重刑にあっても揺るぎなき至上命令であり、運命の掟ではなかろうか」(IX 123)と問いかけている。ファシズムが台頭してきたこの時期、ファシズムの反人文主義、非合理主義、野蛮に対して、人文性を擁護することがマンにとって急務となっていたのである。

マンは「ゲーテの『親和力』について」(1925年)において、シラーが素朴的なものと情感的なものとの対立、自然と精神との対立において、精神のみが自然を求めて努力するものとし、自然、すなわち素朴なものはそれ自身のうちに安らうものと述べているのを誤りとし、努力は精神の側にのみあるのではなく自然の側にもあると述べる。「自然も情感的であり、その目指すところは精神化なのである。自然と精神の、互いにあこがれ求め合う途上の高所の出会い、それこそが人間なのである」。(IX 177-178)さらにマンはここでもゲーテの「諦念」について書いているが、それは「ゲーテとトルストイ」で述べたことをそのまま繰り返したものである。

1932年はゲーテ没後100年にあたりさまざまな催しが行われたが、マンもこの年一連のゲーテ講演を行う。3月18日、マンはベルリンのプロイセン芸術アカデミーで「市民時代の代表者としてのゲーテ」という表題で講

演をする。マンは何年か前にフランクフルトのゲーテの生家を訪れたときの感動から話を始める。ゲーテと同じ都市貴族的市民の出自であるマンにとって「この家の階段や部屋は、様式、気分、雰囲気からいって、いずれも、私には馴染みの深いものなのでした。」(IX 297) マンはゲーテの秩序愛の傾向、「完成せよという制作倫理上の命令」(IX 305)、忍耐強さ、細心さ、労苦と仕事に対する愛という市民的道徳について語るが、これはいつものようにマン自身の密かな自画像である。マンはシラーと比較してゲーテの市民性を特徴づける。ゲーテのリアリズムは、観念から出発するシラーのあり方と対立している。「現実的なものの精神こそは真に観念的なものだ」(IX 313) というゲーテの言葉は、シラーに対抗する反理想主義的な形式であるが、これがゲーテの人間的、人類的なものに対する態度全体を規定している。シラーは市民的観念を政治的、民主主義的な意味で示しているが、ゲーテはそれを精神的、文化的な意味で代表している。ゲーテが闘う者、解放者であったのは、道徳的なもの、精神的なもの、特に性愛的なものにおいてであって、国家的なもの、市民的なものにおいてはなかった。1813年の解放戦争、ドイツのナショナリズムに対してもゲーテは冷ややかな態度を取った。しかし観念的熱狂、政治的熱狂に対する彼の冷淡さは決して愛の欠如を、人間に対する、未来に対する愛の欠如を意味するものではない。というのも「人間、愛、未来、これはすべて一つのことであり、共感と人生に寄せる好意とからなる同一の感情複合体」で、ゲーテの最も深い本質を形成し、「生きる価値のあるもの」(IX 320) という彼の概念を作ったものである。ショーペンハウアーのペシミズムの影響下にあった若い頃のマンは、当時ゲーテの『鐘の歌へのエピローグ』のなかで「生きる価値のある者を神がさらっていくとは」という言葉にぶつかって衝撃を受ける。「生きるということを最高の規準と考えること、そして最高の貴族性とは生きる価値のあることだと宣言すること、そして、この最高の貴族性こそはうまくゆくと破滅からわれわれを守ってくれるはずだとすること——こういう考えは、私が青年時代に持っていた概念を混乱させたのですが、その際私の高貴概念とは、まことに奇妙なことに、地上の

生活に対しては繊細で役にも立たないし適任でもないことに帰着していたのです。」そしてマンにとってこの生の肯定は、「市民性の最も高いかつ最も普遍的な形式すなわち生の市民性」になる。生の市民性とは「生のなかに大股を拵げて立つということ、自然から利益を与えられ優遇されている人間（……）の生の貴族主義なのです。」(IX 320-321)そしてマンは、世界が「生を妨げるうっとしい心的状態のために破滅しかけている」今日、すなわちファシズムが勢力を増大させていく今、市民階級に向かって訴えるのである。「市民は、思い切って、今なお自分たちを支配している致命的な未練がましきや生に逆らう観念形態イデオロギーと絶縁して、未来の味方であることを勇敢に宣言することができなければ、駄目になって、新たに現れてくる世界との結びつきを失うのであります。」(IX 331)「市民階級の偉大な息子で、市民階級から抜け出して精神的なもの超市民的なものへとはいつていった人々は、市民的なものなかに無限の可能性があることの、無制限な自己解放や自己克服の可能性があるということの証人でありませう。時代は、市民階級に呼びかけて、市民階級が生まれながらに持っているこれらの可能性を思いおこし、精神的にも道義的にもこれらの可能性に従う決心をせよと、言っています。」「権力を目指して殺到してくるデモクラシーの敵」に対抗して、「新しい未来的なものへ案内してゆく指導役」(IX 332)をデモクラシーが、市民が引き受けるべきである、と。

三日後の3月21日には、マンはヴァイマルの市立ホールで「作家としてのゲーテの経歴」という講演を行う。すでに「レッシング論」(1929年1月22日、プロイセン芸術アカデミーにおけるレッシング記念祭での講演)においてマンは、詩人と作家との区別、作家を「世俗的な文筆業」として侮蔑し、「詩的才能の聖域」(IX 232)とは截然と区別する今日人気を博している美学を批判し、詩人と作家との境界線は一個の人格の内部を走っているものであり、この二つのものはレッシングの例が示すように「個人的混在として輝かしく現れる」(IX 233)のものであると述べた。今回の講演においてもマンは、詩人と作家とを区別することは「まったく無益な批評癖」であり、「無意識的なもの、知性以前のもの、これこそ天才的なもの

と感じられるもの」に敬意を表すために、「悟性的なもの」(IX 334)を無視し軽蔑しようという願望にすぎず、ゲーテは「このうえなく純粹な素材とこのうえなく強力な悟性とが互いに提携しあえることを示す、すばらしい一例」(IX 335)であると述べている。マンはゲーテのなかの天才的、神秘的なもの、つまり魔^{デーモニック}神的なものに、理性的、明晰なもの、つまり洗練されたものを加えることによってゲーテ像に二重性を与えている。そしてこの二重性の故にこそゲーテは最も偉大な人間なのであり、彼を「人類の寵児」(IX 352)とならしめたのもこの二重性であるとするのである。

5月14日、「フランクフルト・アム・マインのゲーテ博物館増築祝賀会にあたっての挨拶」においてマンは、他の精神世界の範例、たとえばヴァーグナー、ニーチェ、ショーペンハウアー、トルストイに対してはいずれも留保、疑念、不信があったが、ゲーテは「究極的な意味において先・像であり、自己の存在を完全なものなかに投影している原・像、超・像」(X 328)であったとゲーテに対する信仰告白をしている。

3. 『ヴァイマルのロッセ』のゲーテ

トーマス・マンは1933年11月19日の日記に記している。「年を取ったロッセ・ブフ・ケストナーがヴァイマルを訪問するという短編^{イブエ}あるいは戯曲の素材がまた頭に浮かんできた。この素材はファウストのアイディアとともに、生産的なものになることを期待させる。」⁽¹⁶⁾36年8月23日にヨゼフ小説の第三巻『エジプトのヨゼフ』を擱筆したマンは、第四巻に取りかかる前に「気分転換のために」⁽¹⁷⁾別の作品を挟むことにする。35年、36年の日記を見るとマンがすでに「ゲーテ＝ロッセ・ケストナーという仕事の計画」⁽¹⁸⁾のための読書や資料収集をしていることがわかる。36年8月25日には「ゲーテの短編のための準備の覚え書き」を作り⁽¹⁹⁾、11月11日には「物語『ヴァイマルのロッセ』第一ページを書いた。」⁽²⁰⁾それは1816年のヴァイマルを舞台にした物語で、「この作品で私は、ゲーテその人を実際に登場させるという法外な楽しみを味わうでしょう。大胆な企てでしょう？でも、40歳の時には避けてしまいましたから（『ヴェニスに死す』の

時です……), 60歳の今, 喜劇風にやってみるつもりです。』⁽²¹⁾『ヴァイマルのロッセ』はマンのゲーテ受容の総決算とも言うべきものである。

『ヴァイマルのロッセ』は, ゲーテの伝記においてはほとんど重要な意味を持たないある小さなエピソードを素材として取り上げている。『若きヴェルテルの悩み』のロッセのモデル, 今は未亡人となって久しい宮中顧問官夫人シャルロッセ・ケストナー(旧姓ブフ)が1816年の秋にヴァイマルを訪れ, 若き日の男友だちゲーテと44年ぶりに再会したというエピソードである。二人が再会する場となるゲーテ家での午餐会は, 全部で九章からなるこの小説の第八章で描かれ, ゲーテ自身が初めて現れるのも第七章においてである。第一章でロッセがヴァイマルの旅館に到着して以来, その日のうちに次々と訪ねてくる客との対話が第二章から第六章までを占める。訪問客たちはそれぞれ自分にとってゲーテとはどのような人であるのかを語る。ゲーテの「対象は幾重にも照明をあてられることによって, その完全な姿を『ますます燃えあがらせる』というあの『反復投影』の原理」⁽²²⁾をマンはこの小説に用いているのである。

13年間ゲーテの書記を勤めているリーマー博士が第三章に登場し, 「世間普通の熱狂的な心酔からではなしに, 落着いて冷静に, 一種のリアリズムで」(423)ゲーテについて語る。リーマーはゲーテの側において感じる「異常な快感」と「その反対の胸苦しい感じ」について, 「温厚な心」からではなく「無関心」, 「軽蔑」からくるゲーテの「寛容」(411)について, そして「彼にこちらの生命の自我を犠牲として捧げることが, この上ない名誉なことにほかならない」(433)という「苦い榮譽」(416)について, 作品が「ひそかに成長し静かに発展してゆくことを狙っている」(429)ゲーテの仕事ぶり, 彼の勤勉さと忍耐について語る。そしてリーマーは8頁にわたって, マンが「ゲーテとトルストイ」以来ゲーテに関して考察してきたテーマを論じる。主なる神が感激するとは考えられないように, 神には「独特な冷淡さ」, 「破壊的な無関心」というものを与えざるをえない。「神はまことに全体そのものです, したがって, 神は自分自身に味方します, 神は自分の側に立ちます, そして神のすることは, 明らかに, 万物を

包括する一種の皮肉 (Ironie) というものなのです。」(439) 一切を包括する精神は「ニヒリズム」の精神と呼ぶことができるが、そうすると神と悪魔を対立する原理だと考えるのは誤りになる。神は全体なのだから、神はまた悪魔でもある。そこで神的なものに近づくことは同時に悪魔的なものに近づくことになり、いわば、一方の眼からは天国がのぞき他方の眼からは地獄がのぞくということになるが、二つの眼は結局は一つの眼差しになる。それは「絶対的な愛であると同時に、絶対的な破壊もしくは無関心でもあり、神的=悪魔的なものへのあの恐ろしい接近を意味する絶対的な芸術の眼差しなのです、そして、この神的=悪魔的なものへの恐ろしい接近を、われわれは『偉大さ』と呼んでいるのです。」(439-440)

第四章に現れるのはアデーレ・ショーペンハウアー、「巨匠の懇ろなお友達で、自分でも文学に携わっている、才気煥発なサロンの持ち主」(476)であるヨハンナ・ショーペンハウアー夫人の娘である。(アルトゥール・ショーペンハウアーの妹でもある。)アデーレはヴァイマルの社交界や私的な生活におけるゲーテをについて話す。彼女はゲーテがサロンで「暴君」(485)として君臨したことについて、ゲーテは「全然生まれつきの暴君などではなくて、むしろはるかに博愛家の生まれつき」(487)なのだが、「社会、特にドイツの社会は、服従欲が強く、そのために、社会を支配している花形たちを社会自身が墮落させ、花形たちに無理強いして、その優越を堪えがたいほど濫用させますので、ついには社会も花形たちも優越の濫用を喜ぶことができなくなるようなふうでございます」(486)、と語る。これはアデーレの口を借りたマン自身の言葉である。このようなドイツにおける偉大さの含む問題性について、マンは後に「ゲーテ・ファンタジー」(1948年)、「ゲーテとデモクラシー」(1949年)においても同じ趣旨のことを述べている。「ドイツでは、偉人がそれ自体ですでに非民主的な肥大を示す傾きがある。偉人と大衆とのあいだに割れ目——ニーチェの得意な言葉を使えば「距離の熱情」^{パトス}——があるのであって、それは他国——すなわち、偉人が一方では奴隷をつくり、他方では専制的な自我感情の肥大をつくりだすというようなことのない諸国——でなら、こ

ういう尖鋭なかたちでは現れない^{てい}体のものである。」(IX 740, 参照 IX 765)

「アデーレの物語」という唯一副題のついている第五章は、小説のなか
に挿入された物^{エアツェールンク}語というゲーテが好んで用いた形式である。「アデーレ
の物語」はヴァイマルの社交界やゲーテ家の内輪の事情をさらに教えてく
れるだけでなく、ここでマンは政治的テーマを導入している。文化と教
養、秩序が重要であったゲーテは、「ナポレオンが没落すれば、その後
に来るものは、ただ混沌や野蛮人の支配だけだ」(536)と予期し、解放戦
争やそれに伴う愛国的な熱狂に「冷淡な無関心な態度」を取った。彼は1813
年という「ドイツ台頭の年」をただ「悲しい年」、「恐ろしい年」(531)と
しか呼ばなかった。アデーレによれば事実それは「決して良い趣味の時
代」ではなく、あまりにも「啓蒙の光」を欠いた感激に沸き立って全国民
誰もが詩を作り、誰もが「黙示録的幻想、預言的幻覚、憎悪と復讐との血
なまぐさい夢想」(535)に耽っていた。このような状況のなかで孤立的な
態度を取るゲーテは多くの苦痛をなめたのだった。自由と祖国に対する感
激の念を復活させようという考えを述べたパソ博士に対して、ゲーテは次
のように言う。「われわれは、自分がやっていることから出てくるいろい
ろな結果をも見極めることができなければならないのです。私にはあなた
のやっておいでになることが恐ろしい、と申すのも、それは今のところ
ではまだ高貴な、潔白なものですが、しかし、他日ドイツ人のあいだで公然
と非常に恐ろしい愚行となって現れる何か物凄いものの最初の形だから
で、その物凄いものたるや、もし幾分でもあなたの耳に達するとしますな
らば、あなたご自身が墓のなかで転倒なさるようなものだろうと思われま
す。」(511) このゲーテの言葉はナチズムを体験してきたマン自身の言葉
であり、この場面ではアナクロニズムと言わざるを得ない。しかしマンに
とってこれは、第一次世界大戦以来の自分の経験による切実な認識なので
ある。

ゲーテ自身が初めて登場し、ほとんど彼のモノローグからなる第七章は
特別な章であり、唯一、第七章という標題に定冠詞がつけられている

(siebentes Kapitel ではなく das siebente Kapitel)。ここに現れるゲーテはマンの特徴も付与された老ゲーテである。マンは「ゲーテの内的な沈思や形成、ゲーテの感情世界や思想世界を長い独白によって（……）あえて表現させている。」⁽²³⁾ゲーテは老年の偉大さについて語る。「すべてのヒロイズムは忍耐のなかにある、生きながらえて死なないという意志のなかにある、それが大事なのだ、そして偉大さは老年のもとにだけある。（……）偉大さとは、老年の力と持続の重みと精神のもとで初めて生ずるものなのだ。力と精神、それが老年であり、偉大さというものである。」(626) ニーチェの影響を強く受けたマンのゲーテにとって、生きるということは高まるということで、精神を強化して過去の生活をもう一度生きることである。「自己の状態の繰り返しということを知っている、老年における青春、青春としての老年を知っている人間には、精神を強化して、過去の生活をもう一度生きる才能があるのだ。高度の若返りは人間のもので、それは、青春の恐怖、無気力、無慈悲に対する勝利、死を追いはらう生の環の結びなのだ……」。(644) 『西東詩篇』はすでに『ファウスト』と同じものであり、それにもまして『西東詩篇』は『ヴェルテル』の兄弟であり姉妹であり、「段階を違えた同一のもの、高めたもの、醇化された生の繰り返しなのである。」(648)

この章においてゲーテが、つまりマンがドイツについて語る言葉はより厳しく辛辣なものである。ゲーテは言う。「私のなかの最も有能な最善の部分」は、「ローマ人の血と野蛮人の血」が混ざっているリントハイマー家の出である祖母、母の母から受け継いだものである。「私とドイツ人との距離、ドイツ人の下劣さを見抜く私の眼差し」、ドイツ人に対する「私の先天的な嫌悪」はすべて混血ということから来るのだ。「私はドイツ人というこのいまましい民族から出て——この民族にさからって——生きている、この民族を教化するという天職を与えられて、何ともいえないほど不安で不快な、地位からだけでなく、本能からしてすでに孤立した生活を送っている（……）」。(657) それにしても、ドイツ人が明晰を憎むのは正しくないし、真理の魅力を知らないのは嘆かわしい。「彼らが幻影や醜

酩や、熊の皮を着て戦う狂暴な勇士さながらの度外れをすべてありがたがるのは、厭わしい、——有頂天になって羽目はずしたならず者が現れて、彼らの最も下劣な性質を呼び起こし、彼らの悪徳を支持して、国民性とは野蛮な孤立のことだと思えと教えるたびに、彼らはそういうならず者の言うことを信じて帰依する、——彼らは、いつも、品位というものを徹底的に失ってしまう時こそ、自分たちは偉大なすばらしい人間だと思う、そして、外国人がドイツの代表者と見なして尊敬する人々に、非常に陰険な怨みの眼差しを注ぐのだが、浅ましいことだ。」(657-658) このゲーテの言葉がナチズムのドイツを、そしてマンとドイツ人との関係を意味していることは言うまでもない。そして、アメリカ合衆国に移住すると、ただ「どこでも私のいるところにドイツ文化がある」⁽²⁴⁾とだけ宣言したマンは、ゲーテに次のように言わせるのである。「彼らは、自分たちがドイツだと思っている、ところが私こそドイツなのだ、ドイツは、根こそぎ亡び去るとしても、私のなかで続いてゆくだろう。」(658) さらにゲーテが語る次の言葉は、小説『ヴァイマルのロッセ』においてマンがドイツ人に語ろうとしたこと、伝えようとしたメッセージである。「私は、あの肌や髪の色を浅黒いリントハイマー家の女が男の姿になったものなのだ。子宮であると同時に精子なのだ、私は男女両性を具えた芸術で、あらゆるものから影響されるが、しかし、私が受胎したものは、私の影響を受けて、世界を豊かならしめる。ドイツ人もこうであるべきだと思う、その点で私はドイツ人の象徴であり、模範であるのだ。ドイツ人は、世界から受け取るとともに世界に贈り与え、生産的にしてくれる賛嘆の念に対してはすべて心を広く開き、悟性と愛とによって、仲介調停するという心がまえによって、精神によって——というのも、精神とは仲介調停する心がまえだからだが——偉大であるというようではなければならない、これがドイツ人の使命なのであって、強情に独創的な国民だと言い張り、殺風景な自己観照や自己賛美に耽って愚鈍になるばかりか、無知のまま無知によって世界を支配するということがドイツ人の使命なのではない。」(664)

最終章でシャルロッテはゲーテの招待で観劇をする。テーオドル・ケ

ルナーの『ロザムンデ』を一人で見物しながらシャルロッテは考える。「人道の境界 (die Grenze der Menschheit) は、多分ただ一つしかなくて、その境界の向こうには、天国もなければ地獄もないか、または、天国があると同時に地獄もあるのだ、そして、この境界を踏み越える偉大さというものも恐らくはただ一つしかあるまい、つまり、それは放埒無道と純粹さとをどうにかして混ぜ合わせて、両方を兼ねそなえている偉大さなのだ」(754) が、「若い自由の戦士」(753) であった作者ケルナーはこういう偉大さのことなどほとんど知らなかった、と。ゲーテの偉大さとはこういう偉大さなのであり、これが『ヴァイマルのロッテ』のテーマでもある。帰りの馬車の中でシャルロッテはゲーテと想像上の対話をする。彼女は言う。ゲーテの現実 は諦念から生まれたもので、諦念から生まれたということは、萎縮から生まれたということでもある。しかし、彼の場合には何か萎縮に付け加えることのできるものがあつた。「あなたの現実 は立派なものに見えます——断念や不実のようには見えず、全く充実した、最高の忠実であるように見えます。そして、威風堂々たるものでございますから、その前では何人も敢えて可能なもの のことなど問題にはいたしません。敬意を表します。」(762)

注

テキストは Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt a. M. 1974 に拠る。括弧内のローマ数字は巻数を、アラビア数字は頁数を示す。ただし „Lotte in Weimar“ (II 369-765) は頁数のみを示す。引用の訳は『トーマス・マン全集』(新潮社, 1975年) に拠っているが、一部変更を加えたところがある。

- (1) トーマス・マンに関する年譜は Hans Bürgin/ Hans-Otto Mayer, Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens, Frankfurt a. M. 1974. に拠る。
- (2) Katia Mann, Meine ungeschriebenen Memoiren, Frankfurt a. M. 1974, S. 98.
- (3) a. a. O., S. 96.
- (4) Thomas Mann. Briefe 1889-1936, hrsg. Erika Mann, Frankfurt a. M. 1962, S. 328-329.

- (5) a. a. O., S. 327
- (6) Thomas Mann. Tagebücher 1933-1934, hrsg. Peter de Mendelssohn, Frankfurt a. M. 1977, S.51.
- (7) a. a. O., S. 51.
- (8) a. a. O., S. 52.
- (9) Katia Mann, a. a. O., S. 101.
- (10) Thomas Mann. Briefe 1889-1936, S. 399.
- (11) a. a. O., S. 411.
- (12) a. a. O., S. 413.
- (13) Thomas Mann-Karl Kerényi : Gespräch in Briefen, hrsg. Karl Kerényi, Zürich 1960, S.79.
- (14) 【考察】については拙稿「トーマス・マンにおける Bürgerlichkeit——非政治的人間からのデモクラートの誕生——」（『藝文研究』第四十二号）を参照のこと。
- (15) Klaus Schröter, Thomas Mann, Reinbeck bei Hamburg 1964, S.100.
- (16) Thomas Mann. Tagebücher 1933-1934, S. 251.
- (17) Thomas Mann. Briefe 1889-1936, S. 427.
- (18) Thomas Mann. Tagebücher 1935-1936, hrsg. Peter de Mendelssohn, Frankfurt a. M. 1978, S.64.
- (19) a. a. O., S. 359.
- (20) a. a. O., S. 392.
- (21) Thomas Mann. Briefe 1889-1936, S. 430.
- (22) Klaus Schröter, a.a.O.,S.122. 山口知三訳「トーマス・マン」（理想社, 1981年）167頁。
- (23) Ernst Cassirer, Thomas Manns Goethe-Bild. Eine Studie über Lotte in Weimar. In : Thomas Mann, hrsg. Helmut Koopmann, Darmstadt 1975, S. 14.
- (24) ハイナリヒ・マン 「弟トーマス」【トーマス・マン全集別巻】 9 頁。